

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2692600212		
法人名	社会福祉法人 五十鈴会		
事業所名	グループホーム風花		
所在地	京都府福知山市字行積141番地		
自己評価作成日	令和2年11月5日	評価結果市町村受理日	令和3年1月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&amp;JirvoyoCd=2692600212-00&amp;ServiceCd=320&amp;Iype=search">http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&amp;JirvoyoCd=2692600212-00&amp;ServiceCd=320&amp;Iype=search</a>
----------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会		
所在地	京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル梅湊町83番地1「ひと・まち交流館 京都」1階		
訪問調査日	令和2年11月20日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当施設は山間部に位置し、自然豊かな環境の中にあります。居室からの景色も良く、敷地内にある桜、周辺の田や山々の四季折々の風景を楽しむことができます。その様な環境の中、ご利用者は散歩をされたり、畑仕事や草むしりなど、身体を通して自然を感じることができています。また、ご利用者の多くが田畑をされてきた方であり、敷地内の畑で季節の野菜を作り、収穫したり、地元住民の方からいただいた新鮮な野菜を自らで料理し召し上がっています。それらの仕事では、ご利用者自身が持っておられる能力、出来る事・得意なこと等を生かしています。単調になりがちな日常生活を楽しく、少しでも刺激を持っていただけるよう取り組んでいます。今年はコロナウイルス感染予防のため家族様や地域との交流ができない事態となりましたが、施設ではオンライン面会を実施し、家族様には好評を得ている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

高齢者生活支援施設きらら(地域密着型特養きらら定員29名、ショートステイ定員10名、グループホーム風花定員9名)は、社会福祉法人五十鈴会の傘下として平成24年に開設されました。グループホーム風花では、今期から職員で話し合った独自の理念「〇施設入所が終わりではなく、『希望の持てる生活』を目指します。〇職員はすべてのサービスに誇りと責任をもって、ご利用者と共に時間を歩みます。」と掲げ、重要事項説明書内にも記載して、その責務と志を表明しています。コロナ禍であっても日々の散歩やドライブ、予約制での家族面会など継続しています。利用者の平均年齢は90歳、平均介護度2.71で、外出時車椅子使用者は1名のみです。食事は利用者と共に調理から片付けまでおこない、利用者が育てた野菜や頂いた野菜など「美味しい」と好評です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに〇印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに〇印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	〇 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	〇 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	〇 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	〇 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	〇 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	〇 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	〇 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	〇 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	〇 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	〇 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	〇 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	〇 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	〇 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を事業所内に掲示すると共に、施設内研修時には理念の確認を行っている。今年度は事業所独自の理念も掲げ取り組んでいる。法人理念実現のための、ユニット目標、個人目標を作成し、四半期または半年毎に評価している。	法人理念はホームページや広報紙(きらら通信)に掲示し、グループホーム風花の理念は重要事項説明書に明記して内・外に発信している。広報紙は関係機関や近隣住民合わせて280ヶ所に配布している。職員は単年度ユニット目標「ご利用者と職員が一緒に楽しみ、笑顔になるようなレクリエーションやイベントなどの取り組みを考え、実行していく」を掲げ、6か月ごとに評価して介護サービスを展開している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年度はコロナウイルス感染予防のため地域との交流はほとんどできなかったが、今迄通り地域から野菜やお米などをいただいた。11月には地域のボランティアから冬の花の寄せ植えを利用者と一緒にとの申し出があり、コロナウイルス感染予防策を取りながら実施する予定である。	コロナ禍でも散歩で知り合った近所の方や利用者家族から、野菜や米、花が届く関係は続いている。また例年、ボランティアとしてお餅つきや運動会の手伝い、鹿の侵入防止ネット整備、年末には窓の掃除や除草作業、花の植え替えなど、継続しての支援者は多い。今年もプランターに冬の花が咲いている。例年なら敬老式典やクリスマス会には保育園児の太鼓や踊りの来所がある。中学生の体験学習、大学生のインターンシップ、即戦力人材育成など受け入れをしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の委員である民生児童委員や地域包括の職員、地域コーディネーター、また、地域から働きに来ている職員を通して、地域での問題や課題等を拾い上げ、相談があればいつでも対応できる状態であることをお伝えしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度はコロナウイルス感染予防のため、会議を中止した月もあったが、各委員(利用者家族代表含む)には書面による事業所の現状報告を行うと共に委員からの意見や要望を集約した。その意見等に対して施設からの回答を書面にて送付した。また、利用者家族にも会議等の書類を送り、事業所への理解と透明性の確保に努めた。また、職員にも回覧し、サービスの質の向上に努めた。	会議メンバーは13名おられ充実している。生活の様子や運営状況を報告後、事故やヒヤリハット事例報告をして、その対応策について活発な意見交換がある。メンバーから「利用者の様子を具体的に知りたい」との要望があり、インターンシップ用の動画を活用した。また「地域の住人に入浴ができなくて困っている方たちがいる」との相談を受け、地域交流スペースと風呂場の提供を提案している。議事録は全家族に送付している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議には市の担当者や包括支援センター担当者が参加され、施設の状況報告や取り組みについて報告している。会議では市の担当者と情報共有や意見交換を通して良好な関係が保たれている。また、事業運営や書類等で分からないことは市の職員と相談しながら解決に向け取り組んだ。	市の担当課長は運営推進会議のメンバーである。会議時や必要書類の提出の機会を捉えて、困難事例や書類などの相談や助言、指導を仰げる関係が築かれている。介護相談員の来所が月1回あり、利用者から近況を聞いた後、事業所と意見交換してサービスの質の改善につなげている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止の勉強会を年に2回開催し、その研修では事例検討も行った。職員はユニット会議で身体拘束について話し合い、玄関の施錠の解除や言葉による拘束をしないを念頭に置き、利用者の尊厳の保持に努めた。	「身体拘束廃止委員会」を月1回開催して事例検討もおこなっている。年2回の全職員(事務、清掃、宿直職含む)対象の研修会と職員会議でのミニ研修を実施し、身体拘束をしない工夫を話し合い意識付けをしている。玄関は日中施錠を解除して、見守りを強化確認している。スピーチロックも含めて全職員が日頃のケアを振り返り介護に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束廃止の勉強会やミニ研修、また職員会議の中で高齢者虐待についての学びを深めている。また、実際にあった新聞の記事などを職員に回覧し、問題や課題に対する意識付けを行うと共に、現場における課題解決に向け取り組んでいる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、利用者で成年後見人制度を活用していることもあり、職員は制度への理解はある。また、様々な制度についてはパンフレットを設置したり、ユニット会議を通して学ぶ機会を設けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書、重要事項説明書に基づき説明を行っている。契約時等は利用者や家族の不安や疑問点を尋ねながら一つ一つ丁寧に説明し、納得のいっただで署名してもらっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	2ヶ月に一度の運営推進会議や利用者アンケート、苦情箱等において回収された意見や要望は戦略会議やリーダー会議にて検討され、集計結果を全職員に回覧し、周知している。苦情やアンケート結果はきらら通信に記載し公開している。また、それらの意見を受けての取り組みについても利用者家族に書面にて発信している。	職員は家族の来所時には声掛けをして諸意向を聞き取っている。電話での報告や意向確認もしている。聞き取った内容は連絡ノートに書き共有している。面会は、コロナの流行に合わせ中止もするが、現在は予約制で2名以内15分間で対応している。年1回「顧客満足度調査」を実施して、意見や要望を戦略会議や各会議で検討した後、結果は広報誌に掲載して家族に報告している。家族からの要望で、食事メニューやゲストルームの目的などを説明した冊子を作製し送付している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者はユニット会議への参加や職員会議等を開催し、職員の意見や提案を聞く機会を設けている。また、個別面談の他日頃から会話の機会を作るなど、意見の集約に努め、運営に反映している。	管理者は各会議に出席している。現場にも出て、日常的に職員とのコミュニケーションを図っている。個人面談は年1回、法人の本部長がおこなっている。職員は個人目標を立案し、リーダーがコメントを書いている。ユニット会議では「夜勤業務が不明確である」との意見に対し、業務整理をおこなった。日頃の利用者の声(行事食やレクリエーション活動内容の希望)を伝え検討している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者は現場に足を運び、日々の職員の勤務状態を知るとともに、ユニット会議への参加、個人面談や職員からの相談にその都度対応しながら、職員の意見を集約し、働きやすい環境整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修の一覧表を作成し、また職員の研修参加の有無を把握し管理している。施設内研修は十分ではないが各委員会での研修やミニ研修会、介護情報などを回覧している。また、研修前の課題提出やミニ勉強資料(テスト)などを配布し、介護の質の向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	今年度はコロナウイルス感染予防のため様々な交流が中止となっている。その様な中でもオンラインを活用したり、また、最近では研修等が再開され、他施設との意見交換や交流を図りながら、自施設のサービスの質向上に向けて取り組んでいる。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	コロナ禍の中であるが、緊急事態宣言が緩和された後は細心の注意を払いながら短い時間ではあるが施設見学や初回面談日(訪問)を行い、本人や家族とゆっくりと話をしながら現在の困りごとや不安、要望などを聞き取り、相互理解を深めながら本人との関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設見学や初回面談日(訪問)、電話等において家族の希望・要望、悩み事を聞き取り、施設での今後について展望が持てるように説明し、安心感を持てるように対応することで、信頼関係の構築に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ケアマネジャーや他事業所と情報交換をしながら、本人と家族等が納得がいくようなサービスが受けられるよう支援している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	事業所の理念の通り、利用者には「希望の持てる生活」「ご利用者と共に同じ時間を歩みます」を念頭に置き、職員は利用者の持っている能力を最大限に生し、互いに助け合いながら楽しく生活できるよう信頼関係を築いている。料理や畑仕事など、利用者から教えて頂く機会も多い。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナウイルス感染予防のため面会や外出ができない利用者や家族にはオンライン面会や電話等にて対応している。また、手紙やメニュー表等を家族に送り日頃の様子をお伝えしている。また、家族からも本人に手紙や写真等が届くなど関係性が継続している。何かあれば家族と随時連絡を取り、相互の関係性が薄れないよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナウイルス感染予防の様々な制約の中でも、外出やドライブに出かけ、馴染みの場所や物など触れたり観たりできる様支援している。オンライン面会や電話、手紙を書いて頂くなどの機会を作っている。施設周辺の散歩の際出会った方とあいさつを交わす、近所の方が野菜を届けてくださる機会がある。	コロナ禍でもできる範囲で外出はおこなっており、福知山城へのドライブなど楽しんだ。散歩時に知人に会ったり、併設施設との交流など継続している。家族には、月1回写真と手紙で利用者の近況を伝えている。個別では、家族と温泉や食事に出かける利用者がおられる。ボランティアの方々との新しい関係も出来ている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員間で情報を共有し、利用者一人ひとりの特性を理解するとともに、利用者同士が仕事や散歩、レクリエーションなどの共同作業を通して、互いの関係性の構築に努めている。皆さんがゆっくり集えるよう談話室の環境作りを行い、自然とそこに集い会話を楽しめる小さな社会ができています。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスが終了した後であっても、家族からの電話での問い合わせや相談があった場合は対応している。また、併設特養へ入居された利用者の情報提供や意見交換など特養の職員と行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居前の面談や入居時、計画書更新時等、利用者から意向をうかがっている。また、日々の会話や関わりの中から、意向や思いを聴きとると共に、利用者の身体状況や今の様子から推察されるニーズを明確にし、本人や家族の意向に沿えるよう努めている。	これまでの生活様式が継続できるように、本人の思いや希望、生活歴、暮らし方など、センター方式シートも一部活用して把握している。その上で日々の生活での気づきやADLの変化など、アセスメントシートに赤字で追記して全員が共有している。年1回更新している。現在意思表示が困難な方はおられない。独居で絵を描くことをあきらめていた方が、入居後の支援で絵を描く楽しみを再開している。料理や畑仕事、歌うなどそれぞれ継続を支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の面談、面会時やサービス担当者会議、利用者や家族、前任のケアマネジャー等から情報収集を行うことで利用者像の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々のケース記録(パソコン)及びケース用紙にて毎日のモニタリング 食事摂取量 排泄表等に記載している。それらを、会議等で職員間で情報共有することで、利用者の現状を把握し、小さな変化も見逃さないように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ユニット会議にてカンファレンスを行い、ケアプランにつなげている。また、情報収集用のシート(必要と思われる支援内容)にてユニット職員全員、看護師からも意見をもらい、介護計画書に反映させている。家族からの意向を書面にてもらっている。必要に応じて法人の理学療法士から意見をもらっている。	毎月、全利用者のケアカンファレンスを実施している。担当介護士は、1日付で担当利用者の1か月間の様子5項目(生活全般、食事、排泄、移動、その他)に整理しケース記録にまとめている。介護支援専門員は2か月ごとにモニタリング(評価表あり)をしている。必要に合わせ、医師や看護師、法人の理学療法士、栄養士から意見書を得ている。サービス担当者会議(年1回)前には、介護計画に焦点を当てた家族面談をおこなっている。介護課題は多く抽出しサービス提供内容は個別性を出し、丁寧に作成している。	介護課題は多く丁寧なサービス提供内容となっているが、中に、複数の課題を一つにまとめた表記や目標のイメージが描きにくい記載があった。課題を検討し、1課題1計画で立案し、目標は到達可能で、介護士が同じイメージが描けるように整理すると、介護の統一やモニタリングが今以上に容易になるのではないかと期待する。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録(パソコン)及びケース用紙に毎日記入し、職員間で共有している。ケース用紙にレクリエーション等の様子などを記入できるよう用紙を工夫し、評価に繋げている。連絡ノートにて、情報共有に努めている。ユニット会議にて変化のある方や気づきについて話し合いを行い、次の会議には経過を確認している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	誕生日や行事等には、季節の物や利用者の食べたい物の希望を聞き提供している。また、本来は家族対応の不在者投票などは職員がコロナウイルス感染予防対策を行いながら対応した。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	今年度はコロナウイルス感染予防のため、地域に出向くことや展示品を提供する機会もなかった。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前のかかりつけ医を基本継続し、受診は家族と行くか、またはかかりつけ医が往診している。往診時には職員が同席している。家族対応で病院受診の際には家族にご様子についての説明や血圧の一覧の用紙等をお渡ししている。必要に応じ、かかりつけ医と直接相談している。	かかりつけ医は利用者(家族)が選択して、月2回の訪問診療を受けている。臨時での往診もある。希望者には歯科医の往診がある。併設の介護老人福祉施設きらの看護師は1週間に1回訪問して健康管理や利用者からの相談などをおこなない、状態変化の連絡時は随時対応している。また、諸会議に出席して助言をしている。家族同伴の受診時には、家族から聞き取った病状報告などは、ケース記録や連絡ノートに書き職員間で共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ユニットの会議には看護師に参加してもらっている。急変時または、必要に応じ、特養の看護師へ相談し、対応してもらっている。看護師は日々のケース記録や週1回の来訪にて利用者の状況把握に努めている。看護職と介護職は互いの気づきなど意見を交換を行ったり、看護師からアドバイスをもらっている。また、内服薬の管理をもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	カンファレンスの参加、地域連携室と連絡を取り合い情報共有している。グループホームにてできる対応についても情報を発信し、情報を共有し、早期に退院できるよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時には看取りに関する指針や終末期の対応についてなど、書類と共に説明し家族から意見や意向を聞き取っている。また、同意書等ももらっている。入居されてからも、現在グループホームで支援できる事を説明、今後についての話し合い、施設への申し込みや相談等の援助を行っている。	契約時に「看取り介護に関する指針」と「重度化した場合の対応にかかる指針」に基づき説明し同意書を受けている。ある程度、重度化した利用者の介護はおこなっているが、家族の希望で入院になることが多く看取りの実績はない。看取り研修は毎年おこなっており、今年度も全職員対象に4回に分け実施している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	コロナウイルス感染予防のため消防署による救急救命講習会は実施できなかったが、施設看護師による現場で発生しそうな事例についての実践的な研修を行った。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	日中、夜間想定避難訓練を年に1回ずつ実施している。また、土砂災害時の併設特養への垂直避難訓練も実施した。災害時の避難については併設特養との協力体制は築けている。ただし、自治会等との連携・協働は図れていない。	火災、風水害、地震に対するマニュアルは整備している。防災委員会を年4回開催し諸検討をおこなっている。今年度は緊急連絡網訓練も実施し、その際「職員の招集体制」作りをしてレベル1～4に分類し連絡方法を決めている。火災・災害訓練は「高齢者支援施設きらら」全体で年2回実施しているが、消防署の参加は得られていない。当事業所は土砂災害危険地域であり、市役所と相談して山側でない方への避難や建物3階への垂直避難で対応することとなっている。今年度の「救急救命講習会」はコロナ禍のため、消防士に代わり看護師が講師を務め実施している。当事業所は福祉避難所の指定を受けており、大雨の際、地域住民を受け入れた実績がある。備蓄はある。	とても工夫をされ前向きに訓練に取り組まれている。しかし、専門家の指導があるとより有意義になるのではないかと。消防署に強く訓練指導希望を伝えるとともに、地域の消防団の協力は得られないか検討を期待する。運営推進会議のメンバーにも参加を依頼し諸問題の検討を期待する。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	施設内での身体拘束勉強会では言葉かけを中心に「尊重とは何か?」「プライバシーとは何か?」の意味の理解を深めた。実践では、話の内容によっては居室内にて1対1で話を行うなど、尊厳の保持やプライバシー保護に努めている。	事業所の研修テーマに「個人情報保護とプライバシーポリシー」「接遇におけるマナーと心配り」「接遇について(不適切ケアの言葉について)」があり、職員教育に力を注いでいる。職員同士で注意し合う仕組みとして、気になる言動には、肩を2回トントンと叩く手法を工夫している。叩かれた職員はその意味を考え次に生かしている。介護マニュアルの記載に羞恥心への配慮が記載されている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	慣れ親しんだ関係性の中でも、利用者は遠慮されていることがあることを念頭におきながら、利用者により自己決定してもらえるような声かけ等を行い、自己決定支援に努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事時間、消灯の時間は大まかに決まってはいるが、利用者一人ひとりのペースに合った生活が送れるよう、日頃から利用者の思いや願いを汲み取るよう心掛け、希望に添えるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者は、毎月1回の訪問ヘアサロンを楽しみにしている。また、希望される方には、マニキュアを塗るなどおしゃれが楽しめる様に努めている。また、顔パックをされる方もおられる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	普段の会話から食事の好み等を聞き取るだけではなく、利用者が主体となって楽しんでいただけるよう、調理から食事の準備、または配膳から片づけまで活動的に過ごして頂いている。	食事3食のメニューは利用者の希望を取り入れ各勤務の職員が考えている。いただいた野菜や利用者が育てた野菜が食卓を飾ることも多い。利用者はほぼ全員が切ったり炒めたりができる。調理から片付けまで利用者は参加しているが、買い物はコロナ禍で中止している。料理上手な職員が多く美味しいと評判。誕生日にはお寿司など買っているが、利用者はバーベキューや鍋ものが「皆と一緒に食べるのが嬉しい」と言われる。手作りおやつは、ホットケーキ、白玉団子、たこ焼きなど好評である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎月体重測定の実施。また食事量や水分量を記録する他、各個人の食の特性(好き嫌いが多い方、食の細かい方など)を会議に限らず常に情報を共有しながら、メニューを工夫している。ユニット会議の際には、特養の管理栄養士にも意見をもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔内の清潔保持の重要性を念頭においた上で、出来る限り本人の力を発揮しつつの口腔ケアに努め、必要な部分は職員が支援している。起床時及び毎食後の口腔ケアを実施し、口腔内の清潔に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりに応じたパッド選びと、排尿・排便間隔の把握に努め、個々に応じた声かけやトイレへお誘いすることで、トイレでの排泄を実施している。紙パンツから布パンツに変更された方もおられる。	昼夜を通して、トイレでの排泄は利用者全員出来ている。1番の目標は「リハビリパンツから布パンツへの移行」である。後始末が不十分であった方が介護支援を重ね布パンツに移行した方がいる。「毎日の下着交換や保清」が、排泄の単年度事業計画にある。必要な方には、介護計画に立て朝・夕の陰部洗浄をおこない清潔を保持している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の状態を観察し、看護師とも連携を図りながら、極力薬を使用しない方向で、水分量摂取以外にも、腹部を温めるなど行い(ホットパック)便秘予防に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴2日～3日の間隔を目安とし、朝の9時～夕方17時までの間に入ってもらっている。できる限り、利用者の入浴希望の時間帯等に沿えるよう、午前か午後かで希望される時間帯になるよう努めている。	事業所の単年度事業計画に「入浴を希望されるご利用者には週3回以上、また、夜間入浴など可能な限り、柔軟に対応できるよう努める」とある。週2～3回の入浴を支援している。利用者は、午前か午後かの希望があり対応している。職員は、転倒に注意して話をしたり、ゆっくり湯に浸かっていたき時間は急がさないように配慮している。ゆず湯や入浴剤使用なども提供している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	消灯時間は概ね決まってはいるものの、職員の都合を押し付けないよう、利用者の一人ひとりに応じた時間で過ごしていただいている。また、居室内にて快適に過ごせるよう、職員が訪室し利用者の希望を聞きながら室温調整や換気を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報書を管理し、変更等があった場合、記録に残す以外にも、ユニット会議時に確認・変更後の経過状態などを職員と看護師で情報を共有し、様子観察に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の持っている能力の把握に努め、畑作りや調理以外にも、歌を歌うなどアクティビティの拡大を図りながら、一人ひとりに応じた得意な事や好きな事に取り組めるよう環境作りを行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウイルス影響により、大々的な外出は制限はあったものの、可能な範囲内で外出や散歩をしてもらっている。また、利用者から「行きたい所がある」と言われた場合は、可能な範囲で感染予防に努めた上で外出支援を行っている。	事業所周辺は田畑が多く自然に恵まれた環境にある。天気の良い日は散歩は続けている。コロナ禍で積極的な外出は行けなかったが、感染予防に努め花見やドライブ(月2回)で気分転換を図っている。市長選挙にも出かけた。春頃より戸を開放し、利用者を事業所内に閉じ込めない取り組みを開始している。敷地内は自由に出て動ける。利用者が敷地外に出る可能性もあり、対応は職員間で話し合っており、見守りを強化している。	

京都府 グループホーム風花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持ちたいと言う利用者がいない為、お金を持参されている方はおられない。現在は、コロナウイルス流行に伴い、買い物には行けていないが、外出の際には、感染予防に努めながら利用者に好きな物を選んでもらい、買い物を通して金銭感覚を支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご自身で携帯を持参している方もいる。手紙に関しては、希望される方には便箋やハガキをお渡しし、居室にて書かれた手紙は職員が投函している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂にはその季節に応じた野花などを飾り、季節感を感じてもらっている。また、共有スペースでは利用者が集いやすいようにテーブルや椅子を配置したことで、利用者は職員からの声かけが無くとも自然に集まり会話を楽しんでいる。	食堂は広くて明るい。共同作業やレクリエーション活動に十分な空間がある。利用者の作品「紅葉」が秋の深まりを告げている。廊下も幅が広い。一角に椅子とテーブルを設置した談話コーナーが設けられている。外の景色を見ながらおしゃべりに興ずる利用者は多い。掃除は消毒剤を使用して、毎日職員がおこなって清潔に留意している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人ひとりを観察し、隣同士会話が弾むような席順を考え決めている。また、居室で絵を描かれたり、談話室で読書や外の風景を楽しむ等、思い思いに過ごしていただける居場所作りに努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には、家で使っておられた馴染みの物を持参してもらい、利用者と家族と一緒に考え配置を行っている。また、家族写真の他、誕生日会の時にお渡しする職員からの手作りの色紙やお手紙を飾る場合などは本人の希望を取り入れながら居心地の良い空間となるよう努めている。	居室は二間続きになっている。寝室とリビングとして使用している方は多い。押し入れやベッドサイドテーブル、持ってこられた小タンスで、室内は整理整頓が出来る。テーブルや椅子、炬燵、テレビ、お気に入りの小物など、利用者それぞれの設えがある。コーヒーの好きな方は電気ポットを持参して、自ら憩いのひと時を過ごしている。掃除機は週1回かけ適時利用者と共に掃除している。シーツ交換も手伝う利用者もおられる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の入り口に表札を掲げ、トイレ戸には「トイレ」と分かり易いように紙を貼る等、本人が自身の能力を活用しながら生活が行えるよう工夫している。また、夜間には足元灯が点灯し、安全に移動できるように配慮している。		